

一つの村の人口全体であり、地域教会は社会的な共同体と重なりあっていました。教会と社会は大きく重なりあっていたので。カトリックと同じこの教会のモデルは、十六世紀の再洗礼派（フランスでは殆どいませんでしたが）が抱いていた、今日ではバプテストのものである、もうひとつの教会のモデルに対立しています。このもうひとつのモデルでは、教会の信仰告白を個人的に行ったメンバーのみが、信徒と見なされます。この1世紀の間、信徒の拡散とともに、フランス改革派の教会への帰属は、次第に個人的選択によるものになりつつあるようです。実際のところ、家族的・社会的・文化的な教会以外の結びつきは、かつて、村落共同体において地域教会への帰属に果たしたような役割を、もはや果たしてはいません。恐らく、この進展のある部分は、改革派教会におけるここ数十年間の、洗礼に関するバプテスト神学の成功によって説明されるでしょう。新生児が、洗礼を受けず、ただ教会に紹介されるだけで終わり、後に大人になった時に、自ら授洗を希望する日を待ちのぞむ、というケースがかなり多く見られるのです。改革派にとっては驚くべきこの事実、部分的には、かつての多数包括主義的教会が、バプテスト・モデルに倣った告白者の教会へ変化しつつあることの帰結、と言えます。

しかし、このモデルの変化は、改革派の神学的な、あるいは人脈による (personnel) 伝統によって、抑制されています。この伝統により、改革派としてのアイデンティティが、その背景を持つフランスのプロテスタントによって、家族的遺産 (un héritage familial) として、継承されているのです。この遺産は、起源となった村落や地方に由来し、とりわけ世代を越えた古い記憶に由来しています。この宝は、数世紀の間、最悪の困難の中で守られ、伝えられてきましたが、私たちは、その貴重な宝を保持する責任が、今、自分たちの手に委ねられていることを、誇りと思っています。信仰の個人的選択は、少数派にはたえず必要なものですが、それは、フランス・プロテスタントにとっては、歴史的記憶によって、もたらされるものであります。

C. 信徒の社会的拡散の終結

この社会学的側面については、手短にお話しすることにしましょう。本来16世紀においては、フランス改革派は、非常に様々の社会身分の出身者からなっていました。共同体の軍事的・社会的面をリードする、高位貴族のメンバーもおり、中・小貴族、ブルジョア、職人、商人、法曹家、農民といった階層のメンバーも、多く見られます。迫害は、大貴族の信徒を殆ど消しさり（保身のために、国王と同じ宗教である必要がありました）、他の中・小貴族の数も著しく減らしました。それゆえ、18・19世紀には、プロテスタントは、ブルジョアジー（市民）の諸中間層や、農民の共同体のみによって特徴づけられるようになります。19世紀には、中間・上流市民階級（産業、商業、金融、自由業）において、著しい発展を見ます。プロテスタンティズムは、それまで奪われていた自由を遂に享受できるようになり、知的・道徳的・宗教的文化のゆえに、経済と国家奉仕の新形態において、有能であることを示したのです。

20世紀の、特に第2次世界大戦後には、フランス・プロテスタントの大部分が遂に社会的に一体化するという、最終的な進展がありました。伝統的な農民は、存在してはいましたが、現実にはその殆どが、伝統的農村社会と共に消滅してしまいました。圧倒的多数であるところの他のプロテスタントたちは、今日、中流階級に属しています。このことは、農村や労働者階級出身の改革派が、フランス人の平均より早く、一定レベルの学歴や社会的に責任ある地位に至り、既存の中流階級の信徒に加わったためです。上流ブルジョアジーの改革派については、社会における他のすべての上流階級と同じく、現在支配的である、中流階級の生活様式に融合しつつあります。彼らは、19世紀における程には特別な位置を占めておらず、かつて名望家たちが社会を支配していた時代に持っていた影響力は、もはやありません。そのようなわけで、16世紀には社会の全体とあらゆる社会層を反映していた、フランスのプロテスタンティズムは、今日では、かなり同質的な環境に集中しているのです。社会が中流階級を中心的な核として結集するという、現代社会の傾向を、より誇張した形で示しています。

以上の社会的要素は、現在のフランス社会にお